

## 「仏師」

田舎に新しく御堂を建立した男が、そこに納める仏像を求めて都へ出ます。さて田舎者が物売りよろしく往来で大声を張り上げて仏師（仏像を作る職人）を呼び歩いていると、そこへ通りがかりのすっぱ（詐欺師）が声を掛けます。すっぱは自分こそ仏師であると騙り、明日の今ごろまでに等身大の吉祥天女を作ることを約束して別れます。

次の日、田舎者が約束の場所へ行くと、すっぱが面をかぶり仏像になりすましています。

しかし田舎者はその仏像が気に入らぬと言ってはすっぱを呼び出し、何度も作り直させます。すっぱはその度に仏師と仏像とを演じ分けますが…

人間が仏像のふりをし、何度も入れ替わるというナンセンスな味わいのドタバタ喜劇です。

## 「小鍛冶 黒頭」

神剣を奉じよとの霊夢を見た一条天皇は、三条宗近という刀匠に神剣を打たせるべく、勅使を遣わせます。しかし剣を鍛えるためには自分と同等の力量を持つ相槌が必要なため、宗近は氏神である稻荷明神へと参詣し、神力を頼むことにします。

するとそこへ宗近の受けた勅命を既に知る、ただならぬ雰囲気の様子の子が現れます。童子は中国で漢の高祖、隋の煬帝が剣により天下を平らげたこと、鍾馗が剣の威徳により玄宗皇帝を守護したこと、また日本では日本武尊が草薙の剣で東夷を征伐したことなど、剣にまつわる和漢の故事を物語り、剣の威徳を讃えます。

宗近の打つ剣もそれらに劣らぬ名剣であると童子は言い、さらに神剣を打つために自ら力添えをすることを約束し、稻荷山へと消え失せてしまいます。

やがて注連縄を張った壇をしつらえ、剣を打つ準備を整えた宗近が一心に祈っていると、稻荷明神が颯爽と現れます。

宗近は明神とともに剣を鍛え、完成した剣の表に小鍛冶宗近と銘を入れると、明神は裏に小狐と銘を入れます。さらに明神は天下泰平、五穀豊穰を予祝し、小狐丸と名付けられた剣を勅使に捧げると、叢雲に飛び乗って稻荷の峯へと飛び去っていくのでした。

三條宗近は平安時代の伝説的な刀工です。小狐丸は現在所在不明となっていますが、その代表作の徳川將軍家伝来「三日月宗近」は、源頼光が酒吞童子の首を切り落としたという伝説が残る安綱作の「童子切」（ともに国宝・東京国立博物館蔵）などとともに天下五剣の一つに数えられる名刀です。

「黒頭」の小書（特殊演出）がつくと、前シテの面が通常使用する童子から喝食へと変わり、少し年長けた容貌となります。また手には稲穂を持ち、童子が稻荷明神の化身であることが暗示されます。後半はシテの頭が黒頭から黒頭になり、全体的に重厚かつ稻荷明神の獣性が強調される演出となります。演奏なども緩急がついて静と動が対比され、きびきびと締まった印象を与えるダイナミックな演出です。